

令和7年2月25日

各位

海ごみから革新的な社会を考える会

思考の三原則が道を拓く

小木曾 順務

## 思考の三原則とは？

安岡正篤先生（1893~1983 年/4 男）は高野山真言宗 403 世堀田真快座主の実弟である。

安岡先生は陽明学を極め、昭和期の総理大臣（吉田総理から小渕総理）指南役を務められ、生一本で万世一系の皇統を戴いた単一民族・単一言語の平和な日本と陋規（反意語/清規）・老獐の字が表す易姓革命国家中国との違いがあること指摘され、政事（経世済民）には**思考の三原則が必要である**と著書（東洋思想十講/人物を修める）に記述している。

- 長期的思考：目先に捉われず、長い目で見る。
- 多面的思考：物事の一面だけを見ないで、出来るだけ多面的・全面的に観察する。
- 根本的思考：枝葉末節にこだわることなく、根本的に考察する。

また安岡先生は、指導者には責任と同時に能力が必要（器量・度量を持つ見識）と語り、特に「胆識」（知識・見識に伴う実行力）と「相（みるという字）」の意味を理解し「今、何を為すべきか？」と活きた学問に立ち向かう姿勢の大切さを指摘し、後継者を指導されている。

- 「見」は目が二本足の上、つまり立ったまま低い所から物事を見るので遠くは見えない。
- 「相」の字は木に登って見るという意味、よって、大所高所に立って先の見通しが利くと語る。
- また大臣を「何々相」と言うが民衆のために百年先を見通して大計を立てるからたすけると読む。

遡れば、日本最古の庶民学校「閑谷学校」の熊沢蕃山先生（1619~1691年）は「先ず大義ある善事を行うことを考えよう」と指導、江戸後期300余の藩校を統括する「昌平坂学問所」の儒学者佐藤一斎先生（1772~1859年）は「言志四録」を遺し「言志録88着眼高ければ、即ち理を見て岐せず」（出来るだけ大所高所に目をつければ、道理が見えて迷うことがない。）「言志録150信、上下に附すれば、天下甚だ処し難き事無し」（上下の人々に信用が有ればこの世で出来ないことはない）と訓えている。

一斎先生を師と仰ぐ備中松山藩の愛弟子山田方谷先生（1805~1877 年）は危機的な藩財政を再建するために士民撫育・至誠惻怛（真心と慈愛）の教育を用い、10 年に満たない短期間で見事に再建し、後の明治政府の経世済民に繋いでいる。この七百年続いた武家政治もこの相（たすける）という字の意味を学んだ江戸末期の指導者たちにより、革命ではなく平和裡に天皇に返還された。故に維新と呼ぶと安岡氏は語る。

今日の社会（仕事・研究・機械化・AI）に難解な課題として現れるシンギュラー・ポイント（特異点）をどのように相（たすける）つけ、相（たすける）か？大事な物を失わないためにも「偉大なる覚醒」をし、大義をもって対処措置を講じることを成さなければならないと指摘している。

## 思考の三原則に照らすことで海洋プラスチック問題は解決できる。

世界の国々が功利的な社会生活を目指す、一方で大量の廃プラが大海にごみとなって現れた。日本の省庁担当者はシンギュラー・ポイント（再生エネルギー・経済安全保障・海洋汚染・地方創生）

を改善するための創造・変化の**道**を希求している。幸いに堅実で良心を持つ世のために活かせる再生技術者が育ち、彼らは**徳**を持っている。今日この創造・変化の**道**と再生技術者の**徳**を繋ぐことで環境・エネルギー問題（シンギュラー・ポイント）は対処できるまでになった日本である。

環境・エネルギー問題を解決するためには**徳**を持つ再生技術者が一同に集い、**徳**を持って**道**を語り合い、国が求める**道**づくりを調査する必要がある。この協議の場に再生エネルギー化事業者が連携・参加することで課題が解消でき、結果、経済活動の**功**が進み、経済界が**利**に繋がる。この再生産業が日本の**力**となり、これをまとめ**率**いることが先々の**日本文化**に根ざす社会資本となる。この根本となる**道**を率いることが**王道**であり、この徳に繋ぐことが**教育**である。

この考え方がリサイクル食器づくりの体験から見え、結果どんな素材（高価格素材こそ）も分別すれば全国回収でき、消費者から称賛が得られる事業に転針できることを各位に理解して頂きたい。

省察すれば、年間 1 億 t 弱の原油を輸入する日本経済が諸外国の台頭で揺らいでいる。経済安全保障を支える重要鉱物（12 品目）も、消費するプラスチックも省庁担当者と経済界が連携し全国回収するこが経済界のコスト削減に繋がり、結果、先々経世済民の教育事業として貢献する。

- 全国各地で数多の有機性廃棄物の再生原料化技術（油化・水素化など）が揃い始めた。
- 庶民が廃棄する点滴パックも日本医師会支援で法改正できれば、再生油や水素エネルギーになる。
- 先々再生油や水素エネルギーを必要とする事業者が連携できれば、プラントが設置できる。
- 愛知県は再生エネルギー化プラント整備事業で事業者を支援している。
- 愛知県には海上輸送で受け入れる三河港がある。（全国リサイクルポート 22 港）

このように揃い始めた社会資本を**思考の三原則**に照らし、単一素材の点滴パックを病院内で分別し全国回収すれば大量な資源（約 7,000t/年）となる。この資源を再生技術者（油化・水素化など）に供給することが、技術立国の日本が抱える再生エネルギー問題を解決に導く**道**を拓くことになる。

省庁担当者は目先の重要鉱物やプラスチックに捉われず、消費者から称賛が得られる事業に転針できる可能性調査をする必要があり、よって、プラットフォームを中部経済連合会と連携し創ることである。中部経済連合会に参加する事業所は地球規模の環境改善に向けたプラットフォームの立ち上げに参加し、各々の事業所が培った智慧を道づくりに還元することである。

**思考の三原則**に照らせば、点滴パックの全国回収が一番簡単な**道・仕組みづくり**となる。事業所はこの仕組みづくりに参加し、各界に必要な廃棄物の実態調査を行うことである。また再生油であり、水素エネルギーを先々必要とする事業者が事業を推し進めるために異業種で事業連携（出資）し新規事業所を設立することである。この**道徳**に繋ぐ仕組みづくりを海事業界にも説明し支援を頂くことで、海ごみ問題を解決に導く「政策づくり」も協議でき、先々海洋国家を護る社会基盤を整えることができる。

### 思考の三原則を記述するまでになった経緯

2002 年方谷先生が語る「至誠惻怛」の訓えから論語（君子は自ら反る）と孟子（惻隱の心）の訓えに触れ「私は何を為すべきか？」と自反できた。知育・体育・徳育・食育と**思考の三原則**に照らし全国の学校給食市場の欠けを活かし、またより強い曲げ強度 230Mpa に仕上げ破損率を低減させ、またエコマーク化することで 100 年は続くリサイクル高強度磁器食器事業に転針できることが覚醒できた。

当時、全国学校給食市場を歩く会社役員として道徳とは？にさほど意識はなかったが、1992 年学校給食市場で採用される樹脂製食器（メラミン・ポリカーボネート）で環境ホルモン問題が発覚、また強化

ガラスの破損で失明事故、1995 年市場が求める安全・安心な食器とは何か？と考察している。

遡れば 1960~1970 年代は陶磁器業界も神武景気を体験するが 1980 年代には円高で輸出産業は壊滅、繁栄は必ず頽廃を生むが栄枯盛衰で苦しんでいる陶土づくりから製造までの一貫メーカーである山津製陶(株)は 1987 年割れにくい食器を商品化していた。この高強度の食器こそ活かせる市場があるのでは？卸業者の(株)おぎそはこの給食市場を調査することが新規事業になるのでは？と予感でき、この価値観を信じ 3 年を目処に狭い日本の全国市場の実態調査を開始した。

割れにくい食器を必要とする確かな市場があることを確認したが、差別化する策が見えなかった。2002 年セラミック原料が中国特需（シンギュラー・ポイント）で高騰、**思考の三原則**からセラミックを 30%含有する食器の欠けの回収が功利事業から義利両全事業へと転換する再生ものづくり事業になると考案でき、「つくる責任とつかう責任」（SDG<sub>s</sub> 目標 12）を繋ぐサプライチェーンを構築するために全国の仲間に回収支援を求め、再生ものづくり事業を興し、第 3 回ものづくり日本大賞優秀賞を受賞した。

2015 年納品価格に回収費を充当できる国が希求する広域認定事業（環境省特例）へと仕上げることもでき、また更新のためにホテル市場を調査し、大量に眠っている使い尽くした食器の再生利用を考案し 2022 年環境省脱炭素経営促進モデル事業に応募・採択され、リサイクル高度磁器食器の CO<sub>2</sub>3%削減と比較し 70%削減する「リペア事業」を興し今では料理人各位から称賛を頂くまでの価値ある産業になった。先人たちが関与した陶磁器業界が目指す「完全循環型産業のモデル」を担う道づくりができたことに感謝する。

省察すれば、東本願寺の擬講を務め「今釈迦」とまで慕われた順海（浄徳寺 13 世）の実孫として生まれ、1970 年代の 7 年間で外航商船士官として勤務、その後陶磁器業界に転針し一斎先生の「重職心得 17 箇条」を拝読、その重職心得第 1 条に重役というのは国家の大事を取り計らうべき役で重の一字を失い、軽々しいのは悪い。どっしりと人心や物事を鎮定するところが必要。小事にこせつては大事に手ばかり。瑣末を省けば自然と大事に手ばかりがなくなる道理であると全国から集まる藩士 3,000 名を指導、この江戸期から明治期のはじめに生きた先人たちは全国の先覚者を訪ね歩いている。

「なら、私も狭い日本歩いてみるか？」と全国行脚し先賢の訓えに触れ 2002 年リサイクル事業を興し普及啓発で全国行脚、この体験から先覚者が語る「知・好・楽」が体感できたという経緯である。

過年には哲学者梅原猛先生の著書「経済行動と宗教」を実兄（浄徳寺 15 世）の紹介で拝読し「西洋人の征服思想と東洋人の王道思想」の違いを認識、2022 年安岡先生の訓えを受継ぐ令和人間塾人間学 lab（前関西師友協会）に入会、また 2022 年中部経済連合会に入会し基調講演で「今の時代は循環プロバイダーが必要である」を聴講、また今日指導を受ける先輩諸氏からは「全国の給食市場の欠けを資源保護で回収する事業こそ、安岡先生が語る時代が求める実践事業である」「海ごみの再生原料化、貴方しかできないから頑張れ」と背中を押して頂いている。また今正月、「東洋思想十講/人物を修める」の記述（消費と輸出大国の日本の現状を改善しないといずれ崩壊に向かう）が拝読できたことで、幼少期の祖父順海と商船士官と窯業界で学んだ知識・見識が胆識となり、この香りある豊かな人生を歩けるようになったと思う。この年月を要し巡り会えた再生ものづくり事業が**思考の三原則**の上に立っていたとは？と痛感し、また先人たちが語ってくれた一言、一言の助言に感謝している。

以上